

「主張しない美術」としての版画
版画制作における「媒介の思考」

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
安井 菜緒子

版画は美術の一分野である。にもかかわらず他の芸術分野に比べて版画の評価は低い。版画の特性は複数性や複製性であり、版画は物事を伝える媒体として発展してきた。したがって現代美術における「版画」も、何らかの目的のためのものとしてしか認識されていない。しかし実際に版画が制作される空間には独自の哲学が存在している。本論文では、版画制作のこのような特殊性に注目し、美術を考察するうえでの新たな視点として探求を深めてゆく。本論文では、それを「媒介の思考」という概念でとらえた。

版画とは「版」を介する表現技法である。版画は「版」を媒体とし、紙などに刷られたものを作品とする。そのため様々な素材や道具を要する。この点で版画は、「自分ひとりで」完成する技法ではない。介在するそれらものの助けがあってこそ作品は完成する。そのため版画家は常に何かに頼らざるをえず、「他なるもの」に対して開かれている。版画は第三者を迎え入れ、作者の意思からは離れた「無名性」を伴うものとなる。つまり、「私」が「作品」を「創る」という従来の構図を覆し、作家の存在を消そうとする。版画は己の力で自己のオリジナリティを追求する他の芸術分野とは一線を画すのである。

さらに版画の計画的に進行する作業行程は、いわゆる芸術の感性的、感覚的、直感的な美術作品とは異なるものである。言葉にならないから絵を描くというのではなく、芸術家はとことんまで世界を見、思考を構築しながら制作をしなければならない。本論文の後半では、版画を切り口にもものを見る とはいかなることかということかということ考察した。その際メルロ＝ポンティの視覚に関する身体論を採用し、私は 見る ものであると同時に 見られる ものであるという、常に主にも客にもなりうるという「両義性」を参照した。版画における「媒介の思考」は、「他力」、そして「無名性」を促し、自己を消し主でも客でもなくメディウムと化す作家像を浮きぼりにする。

芸術に意味があるならば、そして美術作家に「役割」があるとしたら、それは「媒介者」として存在すること、それが本論文で導き出した一つの答である。美術が個人やある狭い範囲での限られた人びとの世界になりつつある現代にあって、いかようにも繋がってゆく「開かれた美術」は版画における「媒介の思考」をとおして実現されるのである。